

=研究ノート=

水崎基一の研究―「北海道バンド」の一員として

Research on Motoichi Mizusaki : As a Member of the Hokkaido Band

室 田 保 夫

MUROTA, Yasuo

本論文は明治20年代、北海道の各集治監で働いたキリスト教教誨師たちのグループ、いわゆる「北海道バンド」の一員であった水崎基一（1871～1937）についての研究である。水崎は長野県松本の出身で、同志社で学び、卒業と同時に北海道樺戸集治監の教誨師として赴任する。ここで約2年間あまり、囚人たちに寄り添いながら、他の教誨師仲間と協力し、監獄改良事業に尽力した。この論文で当時の新聞、雑誌類、監獄関係の書籍を利用し、水崎の教誨師時代の活動や業績、思想について考察し、教誨師としての水崎を明らかにする。

This paper is a research on Motoichi Mizusaki (1871-1937) who was a member of the Hokkaido Band, which was a group of Christian prison chaplains of Hokkaido prison during the Meiji 20s. Mizusaki was born in Matsumoto, Nagano Prefecture, studied at Doshisha University, and became a prison chaplain of Kabato Prison in Hokkaido upon graduation. For about two years, he worked closely with the prisoners, cooperated with other fellow prison chaplains, and worked on prison improvement. This study uses newspapers, magazines, and books related to prisons of that time, and examine Mizusaki's activities, achievements, and ideas to clarify his role as a prison chaplain.

はじめに―「北海道バンド」、そして水崎基一とは

従来、近代日本のキリスト教史、とりわけプロテスタント史を紐解くと、そのルーツとして「札幌バンド」、「横浜バンド」、「熊本バンド」の代表的な団体（三大バンド）が指摘されてきた。この他にも「静岡バンド」は有名であり、他に松江バンド、築地バンド、弘前バンド、神戸バンド等のグループがあることは周知のことである⁽¹⁾。では表題に掲げた「北海道バンド」とは一体、如何なる集団を指すのだろうか。

この名称を最初に唱道したのは生江孝之である。明治20年代の北海道下の集治監でキリスト教教誨師たちが囚人たちに寄り添い、監獄改良事業を展開した。具体的には大井上輝前典獄の下に原胤昭、留岡幸助、大塚素、松尾音次郎、水崎基一らの一群を「北海道バンド」と称した。これにつき生江は「大井上典獄の下に監獄改良を主眼として集つた十名内外の基督教教誨師の中より、其の後、我社会事業の発達に多大の貢献をなしたものの、出でたのは、恰も他の三団体の中より他の方面に貢献したものを出したの⁽²⁾と何等軒輊はないのである」と論じ、キリスト教史に燦然と輝く三大バンドと同等の評価をする。また竹中勝男も、上記の人々らが「監獄改良、教誨事業を出発点として釈放者保護事業、感化教育事業、一般社会事業に関心するに至り、その開拓者的位置を持つに至つた事」と論じ、社会福祉史の草分け的な一つに位置づけ、このグループを評価している⁽³⁾。

戦後に眼を転じると、小池喜孝は『鎖塚』の5章「囚人労働廃止をたたかった人々」の3節で「北海道バンド」という言葉を使用し、彼等の監獄改良の闘いを「明治十年代の自由民権運動と、三十年代の労働運動との間を結ぶ、二十年代の人権闘争として評価さるべきものであらう⁽⁴⁾」と高く評価している。またこの集治監を舞台にした小説もある。一方、北海道史から行刑史、福祉史の分野からの研究があり、重松一義『北海道行刑史』（図譜出版、1970）において

詳しく触れられ、高塩博・中山光勝編『北海道集治監論考』（弘文堂、1997）は各集治監の歴史に関する論文集である。そして三吉明は『北海道社会事業史研究』（敬文堂出版部、1969）で「北海道集治監」での監獄改良事業、教誨事業について論究している。また簗木路易は「『北海道バンド』論」（『同志社談叢』20号、1999年3月）で初めて「北海道バンド」に焦点をあてた論文を発表し、メンバーの基礎的情報を記している。また最近の研究として赤司友徳『監獄の近代』（九州大学出版会、2019）や繁田真爾『「悪」と統治の日本近代』（法蔵館、2020）において、近代史、行刑史、教誨や更生、道徳の課題につき論じられ、両者とも「北海道バンド」という用語を使用し、この用語も一般的な認知を得てきている。しかし以上の研究も概してメンバーたちの具体的な活動や思想については考究されていない。⁽⁶⁾

では、ここで取り上げる「北海道バンド」の一人、水崎基一（1871～1937）は如何なる人物であろうか。同志社は近代日本において、とりわけ創立者の新島の馨咳に接した人々から、多彩な人材を社会に送り出している。この水崎も社会福祉や教育、同志社の歴史からも重要な人物であるにもかかわらず、あまり研究の対象にならず一般的に知られていない。さしあたり水崎に関する研究史を整理しておくことにしよう。森中章光は『同志社時報』53号（1975年1月）で「水崎基一」を取り上げ、松井七郎は「水崎基一先生と同志社大学」（『新島研究』73号、1988年11月）で彼の生涯につき顕彰的に論じた。さらに筆者や本井康博によって紹介されているが、十分な人物紹介とはなっていない。⁽⁷⁾ そんな中、菊入三樹夫の「水崎基一―その生涯と業績」（『松本市史研究－松本市文書館紀要』26号、2016）は実証的に生涯と業績が論じられた研究論文である。概して水崎についての研究の遅れは水崎の膨大な原稿、草稿、日記類、すなわち『追悼－故水崎基一先生』（以下『追悼』）収載の「御遺稿目録」にある膨大な資料群が焼失してしまったことが一因であろう。⁽⁸⁾

以上、北海道バンドを含めた水崎についての研究史をふり返ってみても、水

崎の人物研究は管見の限り菊入三樹夫の研究が唯一という状況で、とりわけ監獄教誨師時代を中心に水崎を扱った研究は皆無に等しい。この論文では彼が同志社に入学し、苦学生ながら5年間の研鑽を積み、卒業後、北海道集治監（樺戸）に赴任し、「北海道バンド」の一員として活動し、1895（明治28）年11月末に仲間5人とともに連袂辞職する、この2年余の北海道時代を中心に扱う。この教誨師時代は彼の生涯にとって重要な体験であったと思われる。使用する資料としては『教誨叢書』や『獄事叢書』を中心に、『監獄雑誌』『監獄協会雑誌』等の行刑関係の雑誌、そして『同志社文学』『基督教新聞』『留岡幸助日記』等を利用し、彼の教誨師として生き様とその思想を中心に追究していく。教誨師時代に限定するので、辞職した後の水崎については「結びにかえて」で簡単に触れるにとどめる。彼の生涯については、彼が天に召されたとき校長をしていた浅野綜合中学から1938年に上梓された『追悼』の中の「年譜」や多くの追悼文、それらも利用していく⁽⁹⁾。

I 信州松本、静岡、そして同志社へ

1 信州松本、長野での生活

水崎基一は1871（明治4）年11月1日（旧暦9月28日）、長野県東筑摩郡北深志町下々町に水崎好照の長男として生を享けた。水崎家の祖先は藤原氏に出て基一は好忠とも呼ばれており、祖父、曾祖父とも水崎紋十郎という名である⁽¹⁰⁾。水崎家の菩提寺は玄正寺である。水崎には「濃川」という雅号があり、故郷信濃川から取られたものと思われ、論文にも使用されている。ちなみに父好照は当初松本県に仕官し、長野県になった後もそこに奉職している。父の仕事は主に税務官吏の業務であり、その後、静岡に転任する。

水崎は1879年6月、8才にして開智学校に入学する。開智学校は72年、学制発布と共に開校された松本唯一の小学校で、彼が入学する2年前に新校舎が建

築された。⁽¹¹⁾当時の学校では一級飛び越えて進級することもあり、開智学校の主な卒業生として水崎の名前があがっていることから、一応卒業生として認知されていると考えられる。この頃、家計補助のため松本新聞社の仕事をする。水崎は開智学校での学びの後、長野市に出て弁護士小木曾庄吉宅に寄寓し、筆耕によって学資を得、長野中学校（現県立長野高校）に通うことになる。しかし「年譜」（『追悼』2－6頁）には中学校を一年で退学し、翌年小木曾庄吉の書生となっている。それにつき弟の三輪好政は「感謝と追憶」（『追悼』132－134頁）で「兄は中学一年の終りし頃、当時長野市一流の弁護士小木曾庄吉氏の書生となつて二年有余の間、毎日細字を清書し、非常に繁忙であつた。その習慣効ありしか、爾来一生を通じて日誌と書録を手からはなさんだ」と回顧し、水崎の少年時代を「家に在つては家事を手伝ひ、勤勞奉仕をなし、純正仁慈尤も孝養を尽し、學業を奮勵努力せしため、其性情行為に対しては、近隣の人々いづれも称讃せられた」と述懐している。その後、水崎は1886（明治19）年に父の仕事の関係から静岡に移転する。

2 静岡ヘーキリスト教受洗

長野中学を中途退学した水崎は静岡に移り韮山中学校（現県立韮山高等学校）に入学し、約2年間、ここで学ぶことになる。一方、静岡に移転後、水崎は松下之基が開いた「文武館」で英語や数学、漢学を学んだ。⁽¹²⁾また水崎のキリスト者としての生涯を考える時、この頃、静岡メソジスト教会（現日本基督教団静岡教会）に通っていた。⁽¹³⁾

ここで静岡県におけるプロテスタントのキリスト教伝道の淵源をみてみると、カナダメソジスト教会の伝道に始まる。同教会は宣教師マクドナルド、D（MacDonald, Davidson）を1874（明治7）年4月に派遣した。マクドナルドは当初、賤機舎（静岡学問所）の教師として赴任した。就任当初から彼はとりわけ学生に対し熱心に伝道し、同年にメソジストの教会、静岡教会を設立した。

この教会を中心にして、いわゆる「静岡バンド」なるものが形成される。『日本メソヂスト静岡教会六拾年史』（1934）によれば、第一期前期（1874～78）を「マクドナルド時代」、第一期後期（1878～83）を「山中浅川時代」と称し、第二期前期（1884～1886）を「平岩時代」、第二期後期（1887～93）を「小林時代」と時期区分している。彼がこの教会と関係を持ち、洗礼を受けた時代から考えると第二期に相当する。つまりメソヂストの指導者として高名な平岩愼保牧師と小林光泰牧師から影響を受けた。しかし平岩は87年8月に東京に赴任する。かくて水崎は1887（明治20）年6月12日、宣教師カシディー、F. A. (Cassidy, Francis. Albert 1853～1924) から洗礼を受けることとなる。⁽¹⁵⁾

カシディーがカナダメソヂスト宣教師団の宣教師として来日したのは、1886年のことである。彼は静岡で伝道し静岡教会にて水崎と出会い、洗礼を施すこととなる。このように水崎は平岩やカシディー、小林の影響を受け、この静岡教会でクリスチャンの信条のもとで起居していく。また当時、静岡教会員や求道の青年たちにより、86年10月より「静岡基督教青年会」が組織されていた。そこには若き山路愛山や池田次郎吉らも教師として参加しており、会員も7、80名おり、水崎がこの会に参加していた可能性は高い。⁽¹⁶⁾

時を同じくして、水崎は偶然に徳富蘇峰の『将来之日本』（経済雑誌社、1886）を読み、新島襄のことも知り、翌年、同志社に入学することになる。⁽¹⁷⁾ 蘇峰はその著において「平民社会」を希求し「余ハ固ヨリ日本全体ノ利益ト幸福トヲ目的トシテ議論ヲナスモノナリ。然レドモ其議論ノ標準ナルモノハ唯ターノ茅屋中ニ住スルノ人民是レナリ」と論じている。かくて蘇峰の著作により彼の次なる学びの場は新島のいる京都同志社になった。彼がメソヂスト教会での洗礼を受けていたとしても、特段、教派に拘泥することなくキリスト者として新島や同志社への憧憬があったものと考えられる。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

徳富は『将来之日本』を刊行し、民友社を創設し一躍文壇にデビューを果たし、『国民之友』を刊行し、近代化のためのオピニオンリーダーとして活躍し

ていくこととなる。蘇峰の情熱溢れる筆致が若き水崎の心に響き、徳富の師であった新島へと結びついた。もちろん水崎はメソジスト教会で洗礼を受けているが、キリスト教主義を標榜し、「同志社大学設立之主意」を公表し、大学設立へ向けて情熱を燃やしていく新島への憧憬にもつながったことは想像がつく。かくして水崎は静岡から京都に居を移し、同志社に入学する。

II 同志社時代

1 同志社入学

水崎が同志社普通学校に入学するのは1888（明治21）年9月で、93年6月の卒業まで約5年間、新島の下で学窓生活を送る。その頃、新島は大学設立運動においてかなりの無理をしていた。水崎が入学した年の11月、蘇峰の主宰する『国民之友』などの雑誌や新聞に「同志社大学設立の旨意」と共に、「同志社大学義捐金募集取扱」の広告を掲載した。こうした新島の悲願は学生たちにも伝わり、水崎も幾何かの基金を寄附している⁽²⁰⁾。

もちろん新島の大学設立の思念は同志社を創設して以来の悲願であった。そのために多くの有力者への依頼、協力を仰いでいる。募金への旅は日本のみならず外国にも及び、その無理が重なり新島は1890（明治23）年1月23日、大磯で天に召される。

このように水崎は晩年の新島と一年余の交わりで、それも多忙な新島と個人的な接触はなかったと思われる。しかし新島の良心教育や国家への思念は彼の同志社入学、その思想的影響を受けたことは想像に難くない。その想いは卒業後の北海道での監獄教誨師への赴任や、後に彼の同志社教授時代、倫理学の時間に新島のことを学生に講義したこと、そして同志社大学設立のために粉骨砕身してその業務を遂行したことに証明される。

ところで水崎の同志社での生活は決して裕福ではなく、いわゆる苦学生で

あった。そのため学費の補助を中井桜州山人（中井弘、1839～1894）より受けている。この件につき、同級生であった小林正直は水崎を、良心を手腕に運用する人、且つ真摯にして熱心忠実なる人、自己を犠牲とする感激性の人と称し、「明治二十六年出身の同級生たる水崎君の永眠は此非常時局の際国家の損失として痛歎に堪えず。在学当時同君は自学自修開発主義教育の下に其本分を尽し、学費の補助を中井桜州山人より受けられたるも、卒業後の収入を以て之れが返済の義務を果され、今日同志社に中井奨学基金として残り居るものが之れに相当するものにして」⁽²¹⁾云々と回顧している。しかし恩師と仰ぐ中井は集治監教誨師時代に亡くなる（本文3章2参照）。

また牧野虎次は「水崎基一君を憶ふ」（『追悼』117－118頁）の中で「相国寺畔の想ひ出」として、次の様に同志社時代を述懐している。

君は破れた袴で、僕はつぎ縫ひの筒袖で、共に御苑内を散歩し乍ら、維新当時の志士の往来したと思はれる辺りで、慷慨談を高らかに語り合うたことは、つい此間の様に思はれる。……略……君は興至らば詩吟をやるのが得意であつたが、僕には結局讃美歌を歌ふより外に芸はなかつた。土曜日毎に一緒に草履穿きで比叡とか鞍馬とか愛宕とかを駆け廻つて、山河跋涉、浩然の気を養うたこと等、夫れから夫れへと恰も走馬燈の如くに脳裡に浮ぶ。あの頃は御互に苦学生の境遇であつたから、焼き芋、炒り豆位が唯一の御馳走であつた。会費三銭の親睦会でも経済難の点から中々容易に成立ができなかつた。尤もこれは啻に御互のみの間柄ではない。当時の同志社学風がその辺の水準であつたのだ。……以下略……

当時の水崎の人となりや牧野との交友が伝わってくる。牧野は一年上であつたが、後に教誨師時代に同労の人となった。こうした二人の友情はずっと続いていくこととなる。

2 「山本覚馬先生」をめぐる

水崎は『同志社文学』66号（1893年6月）に「山本覚馬先生」という論文を書いている。筆者が渉猟した中で水崎の一等早い論文である。周知のとおり山本覚馬は新島の妻八重の兄であり、晩年には失明し京都府会の議長を務め、同志社創設に多大の貢献をした。水崎がこの山本に対して畏敬の念を抱いていたことは、その武士道的な勇壮かつ一徹な生き方、思想に尊敬と共感を抱いていたからであろう。

水崎はこの論文の文頭に「三度門を叩きて三度教を蒙れり。最後談維新当時の事に及ぶ、先生意気激昂、音吐厲陽、而して熱涙滴々たり。頑骨、余の如きも只だ黯然涙を吞みて低頭黙聴するのみなりき」と記す。ちなみに山本は1892年12月28日、64歳で亡くなっている。「然れども三有月経過して知己の音なきを見、新島先生の民友先生に於けるに比し、山本先生の境遇を悲しみ、敢て短文一篇を草す、又之れ感恩の一微意のみ」と。続けて山本と佐久間象山、新島襄、榎村正直、北垣国道との交友に及ぶ。山本は初めに佐久間象山、後に新島によって泰西の空気を吸収した。そして「会津人士は多く気の人。而して先生は其最も然るもの也。盲目としては二十有余年重ねて四肢不自由となりしより十有幾年、門巷肅條悲しむの夕、白髪遺臣一室に偃臥して往を推し今に及ぶ感慨果して如何ばかりなりしぞ。斯る境遇に処し、若し夫れ気の人にあらずんば誰れか寿命此久しきを保たんや」と「気の人」たる山本を語る。

また「先生の理想」を語り「観ずれば世界は善悪の一大戦場也、平和の福音と武断の銃剣一大衝突場也。露のトルストイ、名ある貴族の身を以て砲煙弾雨の間を駆馳し武勇絶倫、飽く迄有為の将官たるに愧ぢざりき。……略……以て十九世紀の棹尾に於ける活基督となれり、而して其三寸の鵝毛より迸ばしる熱涙は一世を振動す先生の性情行径、全然トルストイたりと謂ふにあらざれども亦大に似類する処のものあるを信ずる也」と、トルストイとの類似性を語る。また山本が万国公法を以前の記憶中より回想し、朗誦して教えていた。「万国

公法は是れ何物ぞ、世界を平和的に一統せんとするものにあらざるや。蓋し先生や万国公法を消化し来りて己が血肉となし、雲煙縹渺たる間に、一点の採光、世界平和の神の王国を認め悠然として人生の行路を終りしものにあらざるなからんや」と論じている。ここには山本を通し平和思想への一端が窺える。そして末尾に「嗚呼天下は觀兵式大將軍の天下なる乎投機英雄の天下たる乎。湘南の滄波声裡、風月の權を弄して高枕し、赤峯山下の別野、浴泉に豪箸を極めて安臥する好福の人ある傍ら、天下若し逆遇嘖々陋巷に窮居し有為の才を試むるに由しなく、鬱憤悶々、勃乎雄飛の機を待つ一大鵬あらん乎。微身為すなしと雖ども好し後者に与みし其翼中に入り政權の不平均矯むるに遲疑せん」と論じている。このように水崎は山本を語りながら、時代状況に己が身を置く。

ところで水崎の卒業後の進路について興味あるエピソードがある。当初、水崎は滋賀県知事中井弘の斡旋で、徳富蘇峰の国民新聞社に内定していた。もちろんこれは彼にとっては絶好の人生の登竜門であった。ところが水崎は感じる場所があって、「断然道を替へて北海道集治監教誨師となることに決心したので。所謂監獄内に呻吟せる罪囚の友となりて、彼等の遷善感化に従事する事となつた⁽²²⁾」ということである。中井もその決断を褒め北海道長官北垣国道に懇切丁寧な書簡を認めた。

このように水崎は立身出世が約束されていた就職を擲ち、教誨師という敢えて困難な仕事を選択した。この決断、覚悟の様子にキリスト者としての召命、彼の一徹な武士の魂が察知できる。ここには同志社の先輩たちの生き様、新島の良心教育への影響があったのかもしれない。かくて水崎は1893（明治26）年6月、同志社普通学校を卒業し北海道樺戸⁽²³⁾に向かう。

Ⅲ 北海道監獄（樺戸本監）教誨師として

1 樺戸へ、「北海道集治監教誨師諮問会」

こうして水崎は1893年8月、樺戸の北海道集治監に赴任し、約2年間、北海道監獄の樺戸本監で教誨師としての職務に就いた。そもそも北海道月形村に樺戸集治監が開設されたのは1881（明治14）年である。その後、北海道開拓に関連して、空知（82年）や釧路（85年）等の集治監が設置された。弱冠22歳の水崎はこの樺戸本監で大井上輝前典獄や原胤昭、山本徳尚らと同労の人となった。

着任三カ月後の11月7日・8日、「北海道集治監教誨師諮問会」が樺戸で開催され、大井上典獄から教誨師たちに14項目の諮問があった。⁽²⁴⁾これにつき詳しく報じているのは『監獄雑誌』で、この記事の報告から諮問会の模様を紹介しておこう。⁽²⁵⁾教誨規定第三条第一項「総囚教誨に於ける道義上の教誨に関する実験如何」について。先ず留岡が先陣を切り、一般的に総囚に対しては「道義」を説いて、「宗教」は個人の選択に任せるのが有効であると回答している。他のメンバーも総囚教誨における道義教誨は基本的に同様の認識であった。水崎も「道義教誨を採用する方適當と存候」と答えている。以下、他の諮問に際し、水崎が如何なる解答をしているかを6～8項と11項をみておきたい。

第6項－囚人の親戚へ囚人改悛の状を告げ親戚の調和を計り出獄後生計の準備なさしむる等の必要あるときは教誨師より直接其親戚へ通信をなすの可否如何。これにつき水崎は「御諮問第六の親戚へ通信するは再犯の虞を拒ぐ為めに必要と存候、左れど公務として取扱ふは如何にや、若し官紀上何の障害も無之上は教誨師の公務として適當と存候」と答え、基本的に必要と答えている。

第7項－内務大臣指示獄務概則により囚人を区分して総囚教誨を施す其区分の方法如何。これにつき水崎は「集治監の如き長期刑の囚徒のみ在監する処には左迄の必要も無之と存候、依て其名目の如く総囚を一堂に集め教誨するは適當と存候、最も特別教誨なるものあれば此祈りには、聖書を研究せんと欲する

物、基督教の要領を聞かんと欲する者、出獄後の注意を聞かんと欲する最近放免囚、此等の囚徒は区分して教誨すべきものと存候」と答え、総囚教誨と特別教誨の利点を指摘した。

第8項－監獄の敷地内に於ては樹木地形等の風致を存すると否やとは囚人感化上の得失如何。これにつき水崎は「監獄の敷地内に樹木地形等風致を添ふるは今日監獄に教誨主義を實行する上には必要と存候、山川草木の人を感化するは幾何幾何と算する能はざれども、冥々の間に人の心性を感化するもの少からざること、存候、殊に監獄の如き日々緒衣を着くる全囚のみに接する所には著しきものあらんと存候左れど監房の近傍は清潔にして草木を植ふるになり単に病監及び教誨堂の傍らに風致を添ふるは穩当と存候」と答え、自然環境の好影響と評価した。

第11項－囚人処遇階級法第四級の囚人に書籍の看読を許すの可否如何。これにつき水崎は「第四級の囚徒に書籍の看読を許すことは適當と存候、是れ第四級の如き囚徒にして書籍を看読する等は実に奇特にして、文学の力と共に改善の方途にも向ふ事と存候」と答え、書籍や文学の力を評価する。

水崎は着任早々で恐らくまだ教誨師に不慣れな状況でありながら、自分の考えを堅実に回答している。ともあれこうして樺戸において水崎は行刑、司法、犯罪、更生、教誨といった困難な課題につき実地をとおして経験を積んでいく。樺戸には原や大井上ら優れた先輩達と接することができ、多くの智識のみならず、キリスト者としての人生の処し方など様々なことを学んでいった。さらに留岡が「監獄は私にとって一つの大きな大学である。囚人は私のためには社会学の教師であつた⁽²⁶⁾」と披瀝したように、囚人からも人生の機微に触れること等々多くのことを学んだと思われる。『基督教新聞』も「主の晩餐をなして同心協力の此事業の為に尽さんことを期す幸ひに優渥なる天恩により前途神の栄への監獄改良の上に現はれん事を欲する也⁽²⁷⁾（教誨師の一人報）」と現地からの声を伝えている。

2 水崎の樺戸時代の日記から

ここで『追悼』に残された水崎の「日記」（『追悼』42－43頁）から樺戸時代の日常生活の一端を窺っておこう。

明治二十七年二月十九日 本日は月曜日にして休暇たりし也。午前勉強をなし、午後原氏と共に乗馬運動をなす。実に愉快たりし也。其午後大井上氏・工藤及福士氏来訪せられ、雑談に時を移すまたこれ快時也。其タエルマイルの週報を読み、得る処多し。

同二月二十一日 午前は「潔白の心」なる題にて教誨す。意の如くなす能はざる也。其夕臨房教誨をなす。竹越与三郎氏伝道上の新企画は、余の意を得たるもの、道話講話は囚人教誨に最も適当なりと称すべきか。

同二月二十八日 亀島氏より書信来る。一読大に得る処あり。男子蓬桑の志、渡北以来大いに消磨せしの感なくんばあらず。此際発憤一段、大に反省する処なかるべからざる也。

同三月三十日 浮田和民先生よりエルマイルの感化監獄の書籍を送呈せらる、余先生に対しても、一層奮起勉強するの必要を感じずるなり。

このように水崎は教誨師の日々の業務のほか、浮田和民より送られた米国エルマイル感化監獄の英文資料を読み、最新の教誨方法や行刑理論の学びに精励している様子が窺える。次の4月2日の日記には吉田松陰伝を読み、水崎らしい国家への気概、気骨が感じられる。

同四月二日 本日午前役所に出で午後少しく勉強す。吉田松陰伝到着せり。喜び何ぞ堪へんや。維新改革の元氣消磨し去らんとする時に当り、奮勵激発、以つて一層の英気を出すにあらずんば我国の後圖豈容易ならんや。大井上氏を訪うて種々の談話を為す。高談快論実に謂ふべからざるをものある也。其論議する所天下の大勢に関するものあり、獄事の進達に関するものあり、又樺戸滞留中の一大快味なり。帰りて原氏と文学上の談話をなす。明日は札比内に赴かんとす。吉田松陰伝を読みて赫然涙なしとせず。天下

の事果して如何。……以下略……

水崎の教誨師時代の日記は、残念ながら『追悼』に残されたこの短いものしか今は読むことができないが、教誨師としての日々の業務のほかには多くの人と会い、また書簡を交わし、内外の書籍を研究し勉強や事業に怠らない日々であった。⁽²⁸⁾

ところで教誨師時代に同志社時代、苦学生であった水崎を支えてくれた中井弘が1894年10月10日亡くなる。この件につき水崎が認めている日記を紹介しておこう。一年後の95年10月11日の段にある。水崎は父として敬慕する中井弘を先生と仰ぎ「余は実に深厚なる情を以て先生に対し、先生も余を眷愛せられたり。毎土曜日には必ず高屋を叩きて清談高論せざるなし。而して今や幽明境を異にし、今世に於ては再び拝顔する能はず。悲哀何ぞ堪へんや。余の今日ある果して何人の恩誼によるぞ。実に先生在りたればなり。一片の報恩もなすなくして今日の訃音に接す。泣きても泣ききれざるなり」云々と述懐している。水崎は人の情けや恩を忘れず義理難い人物であった。ちなみにこの奨学金は返済した後、同志社に中井奨学基金として後進のためのものとして残されていく。⁽²⁹⁾

3 冬期学校と樺戸教会、そして祈り

水崎基一は教誨師の業務と共に、留岡が構想した冬期学校の事業や樺戸教会での伝道活動にも積極的に関わっている。第一回冬期学校については1894（明治27）年3月2日から5日迄開催された。4日の午後4時から教役者会が開催され、水崎は原や留岡らと出席し、午後6時半から11時までの公開講演会が60有余名の参加のもとで開催された。ここで水崎基一は「佐久間象山」という題で講演している。⁽³⁰⁾ 教誨師の外に囚人労働の廃止や免囚事業、あるいは冬期学校や周辺の土地の伝道活動、こうした事業に関わっていくことが、北海道バンドのバンドたる所以の一つである。

一方、「北海道樺戸教会」は1895年6月に原胤昭の努力もあり、献堂式が執

行されることとなり、またその日曜学校は「目下百十四五名の生徒を有し十五歳以上の生徒十六名あり教師は老練着実の聞ある原胤昭氏同志社卒業生にして教誨師水崎基一氏、福士原、相原三夫人及小生の六人となす当地は一小市街地にして児童の娯楽を満すものなきを以て安息日に教会に集まるは快中の快なるものなり教師と生徒の関係は慈父の愛子に於けるが如く温愛の情真に掬すべきものあり」云々と樺戸教会の日曜学校での水崎の活動を伝えている。⁽³¹⁾ちなみに当時この樺戸教会に赴任したのが「北海道バンド」の命名者生江孝之であった。生江は「数次監内を視察し、又大井上典獄に面会して其の人格に触れ、更に原、水崎の指導や勧誘を受け、監獄改良の何事であり、如何なる必要があるかを痛感するに至つた。之が彼をして将来社会事業に身を投ずるに至つた動機である⁽³²⁾」と評されている。

また牧野は樺戸在任中、水崎が夜明け勿々に附近の圓山という山に登って一人早天祈祷を捧げていたその姿を、「監の内外で作業の準備に忙はしき囚徒等が眺めて、非常な感激の念に打たれたと云ふことである」（『追悼』119頁）と述べている。その祈りは囚徒たちにとって如何なる感激であったか。樺戸を離れ釧路へ転任のとき、水崎は「楚々丹心過二年 平生志望以雲烟 圓山明月馬蹄水 情懷長曳石狩天」（『追悼』120頁）と詠んでいる。獄囚の友に対し誠心誠意為した業、天に届く祈りにあつたと思われる。

IV 水崎の論文をめぐって－『教誨叢書』を中心に

1 『教誨叢書』掲載論文（1）

水崎は文才にも優れていたことは衆目の一致するところである。この才能を今、我々は北海道で刊行されていた『教誨叢書』に掲載された彼の諸論文にも窺うことができる。⁽³³⁾20代中頃、彼の小論を読むことによって、当時の彼の主張の一端をみることにしよう。それは北海道バンドとして、あるいは教誨師して

の職業倫理のみならず水崎自身の精神、思想と呼べるものである。

水崎は『教誨叢書』に30を超す論文を発表しているが、筆者が披見できたのは13篇の小論である。その論文名と号数、発行年月は以下のとおりである。①「齋家」(34号、1894年11月)、②「奥山の紅葉」(35号、94・12)、③「感恩」(35号)、④「悔改」(36号、94・12)、⑤「愛国」(38号、95・2)、⑥「誠直」(39号、95・3)、⑦「勤検」(40号、95・4)、⑧「春駒の心を警むべし」(41号、95・5)⑨「紀律」(41号)、⑩「終り迄忍ぶ者は幸なり」(42号、95・6)、⑪「猛省」(42号)⑫「西郷隆盛」(43号、95・7)⑬「我罪の自覚」〔旧稿〕(48号、96・4)、以上を執筆している。ここで少々迂遠な方法かも知れないが13論文の内容を紹介しておくことにしよう。というのは彼が当時、如何なる考えや思想、とりわけ教誨師として何を囚人たちに語り訴えようとしたかを彼の言葉でもってみていき、それが水崎の思想解明への肉薄となる所以でもあるからだ。先ず①から⑦までをみてみよう。

①「齋家」(34号)で水崎は「明德を天下に明ならしめんと欲せば先づ其国を治め其国を治めんと欲する者先づ其家を齋へよとは大学開巻に説示したる金誠にあらずや」と儒教的な言説でもって説く。犯罪の原因は多々あるが、とりわけ貧窮問題であり、それは「齋家の法に熟達せざりしを以てなり」と指摘する。そして「滔々たる犯罪者必しも最初より悪逆無道の者にあらざるべし、惟恒産なし故に教育を受くるなく又礼讓を学ぶなく知らず知らず茲に陥りしものならん憐れむべきの至りならずや」、「余の希ふ所は独立自治の人たれと謂ふにあり」、「独立自治の精神を以て建築するの家は磐の上に建てたるが如し」と強調する。そして新家庭を造らんとする人に対して、前半生の失敗は何が原因であったのか、「人生最も忌むべき驕奢遊逸の習慣に駆られたるものにあらざりしか、胸に手を当て静思一番せば必ず余が言の当れるに思ひ及ぶならん」。天は自ら助くる者も助くべし、総ての事において節約をするべし、そして「牢獄の内」にこの良き習慣を養ふことが必要であると心構えを説いている。

罪を犯した者を如何なる心構えによって社会に送り出していくか、ということとは教誨師の日々の接しかた、教誨師としての在り方の根底思想である。福沢諭吉の言葉を引用しながら社会に出て「独立不羈」なる人物となることを強調する。

②「奥山の紅葉」(35号)という小論は、自然と人間との関係を説いたものであり、内容から少し文学論的な素養も充分窺える。「奥山に紅葉の錦織り出す神の心を心ともがら」という歌を引く。そして「^{ひとや}獄囚の友よ卿等、奥山の紅葉に対して愧づるなき乎裏表あるのかげひなたある人は紅葉に顔向けなし能はざると知れ。人前をのみ造り、善人とのみ見られん事を欲し、怠り勝ちなる身も傍に人ある時のみは、さも働き様よろしき様見せかけ、其人去れば相変らずの地金を出して一刻分時も骨惜しみせんとするもの、如きは紅葉に対し何の申し訳なしと知るべし」と記している。まず文中の「獄囚の友よ卿等」と言うように囚人への呼びかける文言に注目したい。この囚人を「友」という表現しているのも、キリスト教教誨師らしい表現である。そして、「嗚呼天然よ天然よ爾は如何に天真なるぞ、其美も其醜も悉く露呈して敢て介意せざるの勇氣と胆力は如何に感ずべきぞ。山禿げたりと雖も以て之を掩はんとするなし川枯れたりと雖も以て包まんとするなし、更に又人目に聳動するなく無名の英雄、巖穴の君子たる風采を有し千載人をして欽慕せしむる石狩山奥の紅葉は如何にぞや」と述べ、「天地照鑑せらるゝに際し赤心は天地の心に通じ魂飛んで六合の中にあらば五尺の單身亦以て瞑すべきなり」と結んでいる。彼の世界観として「天然」「自然」の裏表のない正直な姿、これに影響を受ける人間、かかるまなざしが人間の正直に生きうる美しい姿でもあるのだ。

③「感恩」(35号)、この論文で人は一人で生きていけない。多くの人の支えや愛に抱かれながら己が存在しているということである。「若し感恩の念なきものあらば之れ人にして人にあらざるもの、天下最大の愚者あらば斯るものをこそ称すべけれ」と断ず。具体的には「父母の恩」「師友の恩」「知己の恩」

「邦国の恩」について具体的に論じ、それぞれの恩に報いることを強調する。

この恩は換言すれば「感謝」と言ってもいいだろう。日々そのことを意識しながら生きていくことの大切さを、民衆とりわけ囚者にたいして語りかけている。

④「悔改^{かいがい}」(36号)、「人は光明ならずんば暗黒、暗黒ならざれば光明の内に生活するものなり。何人ぞ自ら好んで暗黒場裡に生活するを欲するものぞ」と。例えばミルトンの「失樂園」中で「地獄の大王ならしめよ」と叫ぶのは暗黒の象徴でもある。また孟子の言葉を引用しながら「嗚呼人類が光明を得んと欲するは制すべからざるの通情にして恰も向日葵草の花弁日輪に向ふが如し」とする。そして「人生何人か罪なからんや、只だ悔改の遅速に依て人物の高卑を判定するあるのみ」とし、水崎自身も過去に犯した罪の例を白日に晒し、幾つかの罪と改悛の例をあげ、「読む人光明平和の人たらんと欲せば希くは既往の罪状に対し深悔せられん事を」と訴えている。水崎の青天白日の如き正直な心も窺える。

⑤「愛国」(38号)の論文では前段にアイヌの人々やバチェラーのことに触れている。そして「獄囚の友よ卿等」と呼びかけ、「果して幾何日本国の益を計りしぞ、日本の土地に生まれ日本の米を食し日本政府の治下に生存したる者如何でか国恩を報ぜずして可なるべき」云々と。さらに「獄囚の友よ」「自己の地位を考量するときは果して如何なる感想にうたるゝぞ。我日本には悲しむべくも七万有余の罪人あるにあらずや、而して年々之れが為めに国財を消費する三百万円内外なりとの事たるにあらずや此多人数此多額の費用豈に愛国の念ある者焦心憂慮減省に考へ及ばざるものあらん。若し夫れ此七万の同胞を以て工業をなさしむ一大製造場を建設運転せしめ得べし、又此三百万円を以て北海道開墾の事業費に充つとせば茫々たる原野も迅速の間に其奏功を見るに至るべし。不生産的事業の為に此多額の費用を要す幾度あきらめんと欲するものもあきらめ能はざるものありて存するなり」と。

人として生れ来り故郷を思はざるものあらば人にして人にあらざるなり、

日本国に生れて日本国を思はざるものは日本人にあらざるなり。低頭自反悔改の念悠然として興り旧日本仆れて新日本来らんとする時に当り新日本の新人民として愛国の念深甚たる者を見ば只に吾人の喜ぶのみならんや。

水崎にはナショナルな国家観がある。日本人として如何に生くべきかを日本人として問う。日本人としての自覚、国家のために働く、尽くすという表現で彼等の更生を問う。少し愛国主義的視点ではあるが、刑に服し「新日本の新人民」として再起を促す論調となっている。

⑥「誠直」(39号)では「人生の命運の予測すべからざる修忽変幻なる意外の時に意外の事来る、嗚呼人は百歳の寿なく、徳は不朽の命を有す身を樹つるに如かず。思ひを人生の問題に触れしむものは願はくは、誠直なる人間の足跡を天地の間に遺物とせよ」と未来への生き方を示唆する。「新生」かつ覚悟で「誠直」なる人生を一步一步確実に歩みが良き人生の足跡を残していくことに繋がることを期するのである。

⑦「勤儉」(40号)では「獄裡に呻吟する者、思を廻らして過去に及べ何事ぞ我を魔軍に投ぜし、様々の原因もあらん」。その原因は怠惰、驕奢等があったのだろう。だが人は何のために生を享けたか、人は「^{はたら}かんが為めなり生命の存する限りは宜しく全心全力を尽して勉励すべきなり而して労働の結果として来る者は浪費するなく空消するなく節儉の上に節儉を加へて或は子孫の教育費に充て或は慈善事業の為に義捐する等の心掛最も必要なるべし」と。そして「社会に出で再び良民たらんと志せば一門一家興廢の跡に鑑み大に警醒すべきなり」と述べている。また「獄裡に呻吟する者」という言葉に水崎の教誨師としての向かい方が看取出来る。そして教育において最も大切なこととは、書物から教えられることもあるが、「^{みる}観察ことと^{かんが}考究へることによりて自己が自己を教育すること」であると説いている。

2 『教誨叢書』掲載論文（2）

以上、みてきた水崎の文章には彼の豊富な教養が窺われ、かなり難解な文言もある。その多くは囚徒に対して、改俊し、より良い生き方を説いている。残りの⑧から⑬に移ろう。

⑧「春駒の心を警^{いまし}むべし」（41号）では、常時、「春駒の心」といった浮き浮きした心に負けない心の準備を用意しておくことが大切と諭す。「此の春駒の心に打ち負ける者教育もなく分別も立たず人の心の儘に動く事浮き草の如き人に多し。之を思ふにつけても平生の養ひは如何にも必要なり。有期にして再び社会に出づる者は勿論の事無期終身とても改心次第にて恩典を受くるとせば豈に平生心掛け於くべきは実に此事にあらずや。養ひ足らざる者は暖室^{むろ}咲きの梅の如し」、そして「若し此季節に春駒の心を警しめんと念せば豈に臍を嚙むの過をなすことあらんや」と述べている。水崎は平常から沈着な心を持つことを諭す。

⑨「紀律」（41号）では遵守すべき法、規律について説いている。一国の犯罪者とは何か、それは「一国の法律を遵守せざりし者也、邦家の紀律を重んぜざりしものなり。頑愚無教育たる者法律の正條等は知らざりしならん、而かも己を愛する如く他人を愛するの心あらば又犯籍に埋没せんや此心毛頭もなし。これ全く我欲私利に追はれ悪と知りて悪をなせしのみ慨するに堪ゆべけんや」と、そして次のように述べている。

紀律を守るは改心^{しるし}の特徴なり。真心悔悟し来りて紀律を守らんと欲せば改心の特徴たりと謂ふに何の不可あらんや。傀儡^{でく}人形なるものあり能く動き能く廻る、然れども内に内に一片の心魂なし、自動する心魂なきの活動は余の好む所にあらざる也。紀律を守るは全く器械的動作にして更に精神的紀律の活動せるものにあらずんば賞するに足らざる也。

我々は一日24時間、内平均12時間、各自に天職が与えられている。紀律を遵守し「天意に準則して其職を完ふせば人生の快事何物か之に優るものあらんや。

米州の芙氏^{ふらんくりん}は紀律的人物の模型なり書^{しる}し終て慨然沈想せば心魂は飛で米州の天にあり」と。

⑩「終り迄忍ぶ者は幸なり」(42号)は、これも人生の奥義と言うべきか、深い意味ある譬えや教訓が語られている。薩摩琵琶の「武蔵野」という歌「武蔵野に草は種々多けれど摘菜すれば偕も少し皆人は若き時より唯徒に日を送り才智万能なき人は宝の山に入りながら空しく帰る如くなり、偶々此世の人間に生れ来て真如の珠を磨かずば人と生れし甲斐もなし」という歌詞を引く。また太田道灌の歌「いそがすはぬれざらましを旅人のより晴る、野路のむらさめ」を引用し、人生急迫事を為す必要はない。須らず先ず自ら寛くしてゆつくりと事を為すものであると論す。

そして「囚獄の諸子」が常時、自問しておかねばならない4つの項目、「親戚の関係」「改悛の特徴」「自活の方法」「奉教の信念」を挙げる。例えば「自活の方法」について、独立自営の生活を送るには二宮尊徳のような人物を手本とするのがいいとしている。「恒産なき者恒心なし、豊に生活を立て得る者にあらざれば兎角に誤り多し。余は幾度繰り返しても飽くを知らざる程に是非自活の方法を完ふせよと謂ふなり」と論じる。そして「奉教の信念」として「信仰は人を興すの源なり、信仰なきの人は野の葦の如し風吹きて大水出では忽ち倒れて又再興するの氣力だになし」、信仰ある人は「抑ゆれば益々昂り苦しめば益々勇む」云々と宗教の重要性を説いている。このように論じて水崎は「人間として生れ来りて終生獄裡の人となり真如の玉を磨かずば人と生れし甲斐もなし。我れ深く囚者を思ふ希ふ所は以上の四項を完ふせよ」と論している。

⑪「猛省」(42号)は幾つかの例を引きながら次のように述べている。つまり今、監獄の囚われ人となっている現状は自分自身の問題ではなく、係累に及ぶということであり、自分自身の現状をどうみていくかである。脅しというより足下をしっかりと客観的にみることの重要性を論じた論調である。「嗚呼人の罪は怖しきもの哉、其関係する処我身一人のみならず、最も敬愛する母迄も

憂愁痛嘆の内に今世を終らしむ。猛省全非を悟るは誠に斯る時にあらざる乎」、「朝三暮四平々淡々の内に人生を終了せば終に猛省するの機なし然れども身はこれ天下非常の身たるを知らば、殊に我友の死を思ひ父母の死に遭逢せば泣きて省顧し来り将来を警めざるべけんや」と。人は一人で生きているのではない。

⑫「西郷隆盛」(43号)は「時艱にして偉人を思う」という古諺を文頭に記し、井伊直弼、藤田東湖、佐久間象山、横井小楠、そして西郷隆盛といった人物が記される。そして西郷を「百歳に一度生るゝの偉人にして凡庸一様の物が学ばんと欲して学ぶ能はざる所なり」と高く評価する。

先生曰く天道に従へば全世界の詭るあるも更に罵られたるものにあらず。若し天道に従はざるあらば全世界の一致して賞するとも更に賞せられたるものにあらずと天を相手にせよと人を相手にする勿れ。天の為に万事をなすべし。他人を難ずる勿れ只我れに至誠の足らざるを自覚せよ。天則是普遍にして自然なり、左れば天を畏れ天の指命を行はんと欲するものは成功すべし、天は何人も偏視するなく一様に愛護し賜へばなり。我を愛する心を以て他人を愛すべし。一々玩味し来るこれ実に天の声にあらずや。先生が実に感化力の来る処天より出でたるを得ざる也。

西郷の「天を相手にせよと人を相手にする勿れ」とは有名過ぎるフレーズであるが、水崎がこの時代、日清戦争の終結直後を彼なりに「時艱」とする危機感があつたのだろうか。

最後の⑬「我罪の自覚」(48号)は、以前に発表したものであろうか「旧稿」となっている。人が誰でも犯す犯す罪について論じたもので、「静観し来る万事皆我罪なり。豈に敢て区々人を咎めんや、又事を咎めんや。天佑の下吾人此宇宙の間に生命を保続し得ば願はくは罪惡を去りて改悛に向はん。秋風颯々として来り落葉娑婆たり。筆を投じて慨然之を久ふす」と論じている。

以上が『教誨叢書』に発表した水崎の小論の内容である。「獄舎の友よ」と文中にあるように彼の教誨での内容が多い。しかし、囚者に寄り添い、その人

の将来や生き方、人生の意味を情熱をもって語っている。彼の演説は非常に個性的で情が溢れていたと言われていたのも頷ける。このように人を導いていくという姿勢は後の教育者としての水崎の原点になっているように思える。

3 『獄事叢書』の論文と連袂辞職

水崎は1894（明治27）年4月に刊行された『獄事叢書』にも「監獄学を読む」7号（1894・10）、「秋夜静灯の下」20号（95・11）、「典獄の資格」24号（96・5）の3論文を執筆している。ここでは教誨師を辞職した後に掲載された「典獄の資格」を紹介しておこう。

「典獄の資格」は（在台湾）と付されている。この論文の文頭に「余頃日モリソン氏犯罪原因論を読む、内に典獄の資格を論する文あり、老翁クローネ氏多年の實際上心中に往来するものを記す、一読好しとなし友人に示し天下同好の士の一瞥を請はんと欲す」という断り書きがある。クローネの監獄事業の成功要件として「該博なる普通教育を受けし人物」、「経済上及び社会上の犯罪原因及箇人的犯罪原因を了解する智慮があること」、「各下僚の個人的特質を尊重し又意解しなければならぬ」、「最後の判定は自己の方寸ありと雖も宜しく各自の意見を聴取し之を秤量すべし」といった点が肝要とする。そして「斯る事業に当る者にして典獄として最も適当なる智識と才力を有する人材なしとせん」、「監獄事業の大根底とも称すべきは可憐なる囚者は一掬の涙を垂るゝ同情の心也、如何に失敗し落胆せし者も忽ち警起奮興せしむる心也」と結び、典獄の資質を指摘している。この論文は非職となった大井上への追慕、その後任となった典獄への批判、あるいは期待を込めての言説であったのかもしれない。理想とする典獄の在り方を論じることによって、典獄の資質によらなければ真の監獄改良が達成できないという慨嘆であったのだろう。

水崎は樺戸にて順調に職務を遂行していたが、大塚素の渡米のため1895年7月、釧路集治監に配置換えとなる。⁽³⁵⁾この間「北海道バンド」の人々の実践は無

難に運んでいたようであるが、大井上典獄やキリスト教教誨師たちに内務省から圧力がかかってくる。つまり仏教教誨師の併用という問題である。その背景には硫黄山や幌内炭鉱における危険な外役を廃止に追い込んだ反撃であった。加えて大井上典獄への風評、不敬事件が浮上する。⁽³⁶⁾こうした状況で典獄は石澤謹吾となり、仏教教誨師5人が併用されることとなった。⁽³⁷⁾これはキリスト教教誨師たちが認めるわけにはいかない工作であり、水崎は1895（明治28）年11月、原胤昭、末吉保造、牧野虎次、山本徳尚らと共に教誨師を辞職する。辞職の趣意書には「第一、道義教誨主義を採用せられざりし事。第二、作業経済に偏重して感化教誨に重きを置かれざる事、第三、教誨師としては幾宗教の人物を並用すべきものにあらざる事」、この三理由を挙げて5人の名前が記されている。⁽³⁸⁾こうして水崎の教誨師生活も終わり、以後、この職に就くことはなかった。

結びに代えて—その後の水崎

以上、水崎のこれまで全くと言っていいほど不明であった教誨師時代についてみてきた。もちろん水崎という人物は北海道を離れた時は未だ若干20代である。その後、40年近い人生が待ち構えていた。その生涯を略叙して結びにかえておきたい。

教誨師辞職後、水崎は台湾に移る。1896（明治29）年4月に「台湾民政局通訳事務嘱託」となり、6月から、台湾総督府総務部勤務となっている。また同年12月に中国広東に旅し、翌97年12月にも中国を巡遊している。同年11月から翌年かけ3カ月間、英国人カークードに随い台湾全島を巡視している。この間、後藤新平や乃木希典らと知己となる。そして後藤新平から将来の師とも呼べる浅野総一郎と出会う。かくて99年4月に台湾総督府を辞し、帰国する。

水崎は1899（明治32）年5月に英国に向かって旅立ち、最初スコットランドのエジンバラ大学と、ロンドン大学でそれぞれ2年、計4年間、経済学や政治

学、歴史等多くのことを学んだ。『追悼』には留学時の英文日記があり、当地からの書簡もある。⁽³⁹⁾そして1902（明治35）年8月、水崎は4年の留学をおえて帰国し、9月から浅野総一郎の設立した東洋汽船会社に入社する。ここから浅野との関係が始まる。06年には渡米し翌年1月まで石油事業を視察する。

帰国後、1908（明治41）年4月に同志社に移る。同月3日に西末しげと華燭の典を挙げた。15年5月から自宅にて小児日曜学校を開いている。同志社では同志社女学校長等の役職にもつき、同志社大学では教授として教育にも携わった。09年には訳本であるが『英国殖民史』⁽⁴⁰⁾を上梓する。同志社での最大の業績は生前の新島の悲願の実現、同志社大学の設立にあった。同志社基本金募集のため、内外に東奔西走の末、12（明治45）年2月に同志社は悲願の大学昇格を果たした。しかし、学内の内紛に巻き込まれ、18年1月に退職する。同年5月から渡米。ここでゲーリーシステムの教育方法を視察し、12月に帰国する。

かくて翌1920（大正9）年4月、浅野総合中学校創立始業式が挙行され初代校長に就いた。しかし23年の関東大震災にて校舎全滅という危機に見舞われたが、復旧後は彼の理想とする教育を続けていった。この間、神奈川県社会事業協会理事（1925年）、神奈川県内鮮協会理事（24年）、横浜基督教青年会理事長（24年）といった社会事業関係やキリスト教界といった役職に就いている。またこの間、30年に浅野総一郎の逝去（30年）に遭い、翌年に母はつも他界する。水崎本人も持病の胃潰瘍にて入退院を繰り返している。そして37年11月29日、66歳の生涯を終えた。12月2日に浅野総合中学校主催で葬儀がもたれ、蘇峰が弔辞を読み、蘇峰は水崎を「精神一統の精神家」であり、また「善き意味の慷慨家。憂国の士愛国の士」であった。そして「奉仕の二文字」が生涯を一貫した、⁽⁴¹⁾と追悼した。

このように生涯を通観すると、教諭師時代は僅か2年間に過ぎない。しかしこの2年間の経験はきわめて貴重なものと言えるだろう。牧野は水崎の集治監教諭師時代を回顧し「志士の気概に富んだ熱烈な演説（教諭）」⁽⁴²⁾であったとい

う。そして「奥山に紅葉の錦織り出す神の心を心ともがな」という歌が彼のキリスト教教誨師としての姿を表している。

注

- (1) しばしば静岡バンドは三大バンドに匹敵するような評価もされている。太田愛人『明治キリスト教の流域－静岡バンドと幕臣たち』築地書館、1979年、参照。水崎はこのバンドと関係深い「メソジスト静岡教会」（現日本キリスト教団静岡教会）で洗礼を受けた。
- (2) 生江孝之『日本基督教社会事業史』東方書院、1935年、78－79頁。ちなみにこの著より4年早い『日本基督教社会事業史』教文館、1931年、において、第6章第2節「監獄改良事業と基督教徒」の中で、「北海道バンド」という言葉を使用している。この背景には維新以来、仏教教誨師（とりわけ浄土真宗）の評価、比較がある。ちなみに仏教系としては徳岡秀雄『宗教教誨と浄土真宗』本願寺出版社、2006年、がある。
- (3) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』警醒社書店、1940年、131頁。
- (4) 小池喜孝『鎖塚』現代史資料センター出版会、1973年、163頁。小池は自由民権運動研究の一環として、北海道にまで人物を追跡し、その中で囚人達の過酷な強制労働・外役制度故に犠牲となった人々の実態、それが「鎖塚」として残されていること。そして「北海道バンド」たちの思想や行動についても叙述している。かかる点からこの課題を近代史の組上に載せ、北海道開拓、明治政府の政策という行刑史の課題から把握している点で先駆的な著書となっている。供野外吉『獄窓の自由民権者たち』みやま書房、1972年、も自由民権運動との関係で書かれたものである。
- (5) 例えば吉村昭『赤い人』筑摩書房、1977年、山田風太郎『地の果ての獄』文芸春秋、1977年、成田智志『監獄ベースボール』亜璃西社、2009年等があり、当時の集治監の実態が題材として扱われている。
- (6) この中で北海道バンドの中心人物、留岡幸助や原胤昭については、拙著『留岡幸助の研究』不二出版、1998年や二井仁美『留岡幸助と家庭学校』不二出版、2010年、片岡優子『原胤昭の研究』関西学院大学出版会、2011年等で論じられている。
- (7) 本井は『新島襄の教え子たち（ジャンル別）』同朋舎、2019年のⅨ章で「北海道バンド」という章を設けて、主要メンバーたちについて述べており、水崎についても言及している。筆者も前掲書で「北海道バンド」の中心人物、留岡幸助を中心に「北海道バンド」のことを触れており、『近代日本の光と影』関西学院大学出版会、2012年の1章で『教誨叢書』と『獄事叢書』について論じ、水崎については簡単に紹介している程度で充分でない。
- (8) この「御遺稿目録」（『追悼』7－41頁）は水崎の膨大な論稿を「経済、社会・政治、

宗教・道徳、教育、同志社、新島先生、祈祷文、雑」の8項目に分類され、水崎家に所蔵されている膨大な資料群の紹介である。本目録以外に約40巻の日記もあった。これらは「故先生の文筆の御生涯の全貌を忠実に伝へ得る」と説明されている。

- (9) 『追悼』浅野総合中学、1938年には「御遺稿目録」年譜、略歴日記(抄)等の資料群の解説や関係人物、教え子らの回顧が収載されており、彼の足跡、人となり等を理解するに貴重な書である。ちなみに『浅野総合中学』の記念誌、『浅野高校八十年史』(2000年)、『浅野学園百年史』(2020年)にも彼の足跡や年譜もあるが、基本的には『追悼』の「年譜」に依拠している。
- (10) 水崎家の家系については、前掲菊入論文や櫻庭十蔵の「故水崎基一先生生誕の地を訪ねて」(『追悼』181-187頁)を参考にした。ちなみに水崎家は松本市の大火にて類焼し家屋は焼失した。
- (11) 周知のようにこの旧開智学校は国宝に指定されている。とりわけ建築のすばらしさは眼をみはるものがある。
- (12) 菊入論文や『浅野学園百年史』浅野学園、2020年収載の水崎基一の年譜による。
- (13) 静岡メソジスト教会の歴史に関しては、前掲松井豊吉編『日本メソヂスト静岡教会六拾年史』や太田愛人『明治キリスト教の流域-静岡バンドと幕臣たち』を参照した。
- (14) 前掲『日本メソヂスト静岡教会六拾年史』の第3章と4章参照。
- (15) カシディーについては『日本キリスト教歴史大辞典』教文館、1988年、を参照した。
- (16) この静岡教会初期の状況については、山本幸規「山路愛山と基督教-明治20年代を中心に」『キリスト教社会問題研究』26号、1977年12月、を参照した。
- (17) この蘇峰の著は明治10年代の自由民権運動から新しい日本の将来を進化していく方向で捉え、多くの青年の心を掴んだ。
- (18) 徳富蘇峰『将来之日本』の「緒言」。ちなみに、その後水崎は徳富と親しく交わることとなる。浅野中学高校にある水崎の銅像の碑文は蘇峰の文である。
- (19) 『同志社教会員歴史名簿 創立120年記念』同志社教会、1996年によれば、水崎は1892年3月13日に同志社教会に入会している。ちなみに彼の静岡での受洗日は1887年6月12日で、カシデイから洗礼を受けたことが記録されている。
- (20) 大学設立に向けての寄付について、牧野虎次は「新島先生が同志社大学創立趣意書を天下に発表せられた時、先生の膝下にある学生が率先寄附金を申出たはよいが、僕の精一杯の寄附額は、驚く勿れ金一円二十銭也、それを月々十銭づゝ割払ひの月賦で申込んだのである。それでも僕の申出が身分不相応に大額であると私かに心配して呉れたのは君だ。君の申込額は確かに僕のより渺なかつた。身分相応と云ふ処で」(『水崎基一君を憶ふ-相国寺畔も想ひ出』(『追悼』118頁)と回顧している。
- (21) 「級友の誇りとせし君を喪ひて」『追悼集VI』同志社社史資料室、1993年、227頁。
- (22) 牧野虎次「水崎基一君を憶ふ-青年時代の追想」『追悼』118-120頁。
- (23) 『明治廿九年六月調査 同志社校友会名簿』によれば、牧野と同時に普通学校を卒

業した人数は45名である。勿論これは校友会員となった人数である。先輩であった村田勤は「最も多く有為の人物の輩出した時代であった」（前掲『追悼集Ⅳ』226頁）と回想している。

- (24) この諮問会については「北海道集治監教誨師会同報告」『基督教新聞』542号、1893年12月15日において11月6日から樺戸集治監で開催されたその報告がある。出席者は石狩国樺戸原胤昭、同水崎基一、同空知留岡幸助、同末吉保造、北見国網走阿部政恒、釧路国標茶大塚右金次、十勝国帯広中江汪の7名であり、大井上より14の諮問があり、一々互の所見を述べ応答したとある。そして「翌日より事務協議会を開き囚人看読用書籍、犯罪起因分類法、囚人性質分類法、囚人性癖分類法等に討議を凝らし本月十七日を以て議了し其翌十八日各任地に帰向せり」と報じている。
- (25) 「北海道集治監教誨師諮問会録事」『監獄雑誌』5-1、1894年1月25日。以下、同誌5-2から5-4（同年4月30日）まで3回に亘って教誨師メンバーの回答が掲載されている。
- (26) 『人道』229号、1924年11月15日。
- (27) 『基督教新聞』542号、1893年12月15日。
- (28) 例えば在米の留岡は「此頃水崎濃川書ヲ寄ス。其中ニ歌アリ。空知より帰途紅葉を賞観致申候。奥山に紅葉の錦織り出す神の心を心ともがな 奥山の紅葉と題し教誨したるに、五十川元吉（準国事犯者）返歌して曰く、里遠きみやま隠れの紅葉はの赤き心を心ともがな」『留岡幸助日記』1巻、矯正協会、606頁、と水崎書簡を日記に認めている。
- (29) 水崎は1905年9月、「本社出身の水崎基一氏は今回奨学金八百円を本社に寄贈せられたり」とあり、水崎の「御遺族に相談の上金参百円也国庫債券を以て中井奨学金として寄付致候間御受領被下度候」（『同志社女学校期報』22号、1905年12月16日）云々と水崎が下村孝太郎社長宛に提出した書簡が掲載されている。因に、同書簡に残りの500円は、水崎が英国留学に際して無名氏より学資の補助として受けたもので、これも「無名氏奨学金」として寄付したことが認められている。
- (30) 「第一回冬期学校報告」『基督教新聞』556号、1894年3月23日。水崎は翌年1月開催された第二回の冬期学校でも『李鴻章人物論』を論じている（同紙、601号、1895年2月1日）。
- (31) 『基督教新聞』601号（1895年2月1日）の樺戸教会報（生江孝之の報告）。近隣の空知や樺戸教会については大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館、1979年等を参照した。
- (32) 『生江孝之君古稀記念』生江孝之君古稀記念会、1938年、371頁。
- (33) 『教誨叢書』は、1892（明治25）年1月、同情会から『同情』という雑誌が発兌（5号より『教誨叢書』と改題）。その第1号の趣意書で「獄窓に呻吟する彼の罪囚の如きは、就中憐むべき者なれば、吾人は吾人の同情を、主として彼等に注がんと欲す」と囚人に寄り添っていくことを鮮明にしている。彼の論壇の中心はこの『教

誨叢書』となる。

- (34) 水崎は『教誨叢書』21号から33号までに17箇の小論を発表しているが、未見である。
- (35) 渡米する大塚素については拙稿「大塚素小論」『キリスト教社会問題研究』40号、1992年3月、を参看されたい。
- (36) 大井上の不敬事件については、重松一義編著『北海道行刑史』（図譜出版、1970）253～270頁。小股憲明『明治期における不敬事件の研究』（思文閣出版、2010）等で考察されている。また、前掲拙著『留岡幸助の研究』227～231頁も参看されたい。
- (37) 真宗本願寺派本願寺編『日本監獄教誨史』下、1927年、1764～1765頁参照。
- (38) 連袂辞職については、『監獄雑誌』6-12、1895年12月。『基督教新聞』649号（1896年1月10日）にも「北海道教誨師の辞職」として報じられている。また拙著『留岡幸助の研究』も参看されたい。ちなみに水崎が辞職したのは11月20日であり、原は11月26日に辞職し、全員が同じ日に辞したのではない。
- (39) 水崎は留学時、エジンバラから留岡たちに書簡を寄せている。『留岡幸助著作集』5巻、226～229頁（『監獄協会雑誌』12-2、1899年9月20日）。エジンバラにおいてタラックらに会って、ジョン・ハウードの件や監獄事情を報告している。
- (40) 著の「凡言」には「著者カルゴットの深厚なる同情と訳者水崎氏の非常なる努力」に対して文明協会編集局からの感謝が記されている。ちなみに水崎は唯一の単著『浅野総合中学の實現』（平野書店、1931）を刊行している。これは畢生の仕事たる浅野総合中学の設立趣旨をまとめた83頁の著作である。蘇峰の「水崎濃川先生華甲壽詩」の壽詞が最初に添えられている。
- (41) 葬儀の模様については『復刊人道』55号（1937年12月15日）に掲載され、同誌には蘇峰の弔辞と牧野虎次の弔文等が掲載されている。葬儀には山室軍平（弔禱）や牧野虎次らが出席している。また救世軍機関紙『ときのこゑ』1001号（1937年12月1日）には、「二人の教育者」として、水崎と廣津友信のことが記され、その中で、二人とも救世軍の軍友であったと報じられている。ちなみに『ときのこゑ』904号（1933年12月1日）には水崎の山室宛て書簡があり、水崎は「新橋の御開早々よりの精神的同情者であり、『ときのこゑ』のエジトリアルだけは必読致し、大兄が平民文学にて意味深き御啓示をなされ候については満腔の敬意を表し候」云々と認めており、水崎と山室は互いの仕事を認め合う間柄であった。
- (42) 牧野虎次「水崎基一君を憶ふ」『追悼』119～120頁。

※拙論作成において、長野県松本市在住の菊入三樹夫氏にいろいろと御世話になりました。「基一」の読み方も「もといち」とであると教えていただきました。記して感謝申し上げます。

（第20期第1研究会による成果）